

くじら日記

太地町立博物館から



くじらの博物館の飼育員は、夜間警備のために宿直も行います。具体的には、閉館後、就寝前、早朝の3回にわたり、各所の戸締りやポンプなどの設備点検とともに、動物に異変がないかを観察します。合間には、飼育データをまとめたり、研究発表の準備をしたりするなど、普段手を付けにくいデスクワークにも勤しんでいます。

1人での番は心細く、何事も起こらないことを祈って過ごすのですが、過去にはいくつかの事件がありました。水族館の配管が破裂し、天井から洪水のように水が流れ込み、通路が水浸しになったことがあります。バケツとモップをかき集め、開館までに何とかしよつと走り回ったの

飼育員の宿直



宿直の時間、暗くなった館内で泳ぐイルカたち—太地町立くじらの博物館

を覚えています。台風などの荒天時は、停電と雨漏りの対応はしばしばです。自然の力に圧倒

され、なす術もなく夜明けを待つこともありました。

イルカショープールにいたはずの1頭がどこにも見当たらないこともありました。辺りを探すと、プール外に飛び出していたのを発見し、応援に来たスタッフと人海戦術で水槽に戻しました。また、水槽にイルカが1頭増えていたこともあり。妊娠していたイルカの出産兆候を見逃し、人知れず分娩したので。幸い、母子の元気な姿を拝むことができたのですが、飼育員としては苦い記憶となりました。

力が発する超音波だということとほすべにわかりましたが、水槽から千数百メートルまで聞こえてくることには驚きました。まるで、海の中でイルカがいるような感覚です。

さて、私も久しぶりに宿直を担当しました。見回りを終え、床に就くと、「ギキツ」、「カチカチ」と、頭に直接響くような音に気がきました。その音の正体が、イルカが発する超音波だということとほすべにわかりましたが、水槽から千数百メートルまで聞こえてくることには驚きました。まるで、海の中でイルカがいるような感覚です。

イルカの超音波は、対象物に関する距離や方向、速さ、大きさ、動きなどを感知するエコーロケーション（音の反射で周囲の状況を知る）の役割があります。主に、餌となる魚の探索に役立つといえます。夜間の暗くなった水槽では、目よりも超音波を頼りにして泳いでいるのかもしれない。イルカたちの言が織り成す喧騒に包まれ、遠く水族館の一夜は、驚きにも感じました。

（太地町立くじらの博物館 副館長 稲森大樹）

聞こえるイルカの超音波